

# シリア語文学：諸文化の十字路

セバスチャン・ブロック  
石 渡 巧 訳

## 訳者まえがき

次頁以下に訳出するのは、2004年9月20日から22日にかけてレバノンの首都ベイルート近郊のカスリーク聖霊大学 (Université Saint-Esprit Kaslik) で開催された会議「シリア語シンポジウム (SYMPOSIUM SYRIACUM)」において、英国のセバスチャン・ブロック教授 (元オックスフォード大学教授) が行った会議初日の基調講演の原稿である。

ブロック氏は東方キリスト教学・シリア語学の世界的権威であり、英国のバーミンガム大学、ケンブリッジ大学を経て、1974年にオックスフォード大学に招かれた。以来ごく最近退官するまで約30年間の長きにわたりオックスフォード大学の東洋学研究所 (Oriental Institute) で教鞭をとってこられた。発表した論文や著作は数多く、論文集も数冊出版されている<sup>1)</sup>。退官された現在でも、氏の研究への熱意は一向に衰えをみせず、現在でも論文を執筆して研究を続ける一方、シリア語関係の著作物を毎年整理してウェブ上に公開したり、シンポジウム等にも積極的に参加をするなど、シリア語学研究の発展に多大な貢献を続けている。

ブロック氏は、とりわけ翻訳語としてのシリア語の重要性を早くから指摘し、諸文化が交錯するシリア・メソポタミア地域を中心に用いられていたこの言語が、諸文化の伝達を媒介してきたことを強調している。「シリア語文学：諸文化の十字路」と題された本講演も、翻訳語としてのシリア語を取り上げ、その意義を論じている。

この会議に出席をした訳者は、わが国におけるシリア語研究の第一人者である高橋英海氏 (東京大) を通して英文原稿を入手し、ブロック氏御本人に訳出の許可をいただいた。原稿入手の労をおとりくださり、翻訳を一任して頂いた上、翻訳の誤りを丁寧に御指摘いただいた高橋氏に、この場を借りて深い感謝の意を表したい。

なお、訳出にあたって、個人名はギリシア語圏の作家についてはギリシア発音、シリア語圏の作家についてはシリア語発音に従うことを心掛けたが、慣習に従いその原則をはずれるものも多い。また訳文中、ブラケットは訳者による補遺である。最後に、英文原稿にはないが、日本の読者を想定して、比較的詳細な註を施した。わが国では未だあまり紹介されることの少ないシリア語という言葉の重要性を、多少でも伝えることができれば幸いである。

## I. はじめに

私たちはこれから数日間、[それぞれの] 主題について特定の点に着目した、数多くの貴重な報告を拝聴することになります。しかし、今回の会議のテーマ [「文化間の対話」] を考慮する際には、そうした個別のテーマから少し距離を置いて、より広い視野からシリア語文学を眺めてみるのも有益ではないでしょうか。このことを行おうとすると、ごく当たり前のことを言うだけでも、ある驚きをもって迎えられるかもしれません。と言いますのも、紀元後 1 千年期の間に隆盛をみた様々な後期アラム語文学のなかには、ユダヤ教・アラム語、サマリア・アラム語、そしてキリスト教パレスティナ・アラム語、マンダ語の文学などがありますが、最も広範であったのはシリア語文学であるということです。さらに、過去 4000 年間に中東で生まれた前近代の文学で、なお存続している数多くの文学すべてについて考えてみたときに、アラビア文学、ペルシア文学に次いで大きなものはおそらくシリア文学でありましょう。また、7 世紀以降アラビア語が普及するのに先だって、中東で最も広範囲に用いられていた文化言語はアラム語であり、シリア語はむしろその方言のひとつであったということも、念頭においておくべきでしょう。また更に、新アッシリア、新バビロニアといった帝国が終焉を迎える以前、既にこの地域一帯の国際言語であったアッカド語にとって代わって以来、アラム語は実に 1400 年間もその地位を享受してきたのです。

文学とは真空状態で存在しうるものではなく、自らの過去や同時代の影響を外部から絶えず受け続けるものです。そういった影響力は、外部の文化による支配や圧制といった否定的な要素として見られがちであり、もちろんそれがしばしば事実であることもあります。けれどもそうした影響力というのは、新たな創造を実りあるものにしたり、刺激したりすることのほうがずっと多いのです。過去に対しても現在に対してもこうして創造的に応えていくことが、いかなる文学においても偉大な作家たちの特徴のようでもあります。仮に、ある一人の作家なり文学運動なりが、ある理想化された原初の純粹さを保持しようという名目で、いわば外部からの影響に対して境界を閉じてしまおうと画策したとします。そんなことになれば、[その文学が] 発展をやめ、死に至るであろうことは、火を見るより明らかです。

私はこの報告に「シリア語文学：諸文化の十字路」という題名をつけました。そこで私が思い描いている、互いに交差する 2 本の道について御説明したいと思います。一方の道はシリア語文学の本道であり、いわば通時的で、受け継がれてきた過去から今後も創り継がれてゆく未来へと貫いている道です。もう一方の道は共時的なもので、本道から左右に伸びていて、行ったり来たりする道です。[本道を] 横切るこの道は双方向で、外部からシリア語文学への影響と、逆にシリア語文学から他の文学への影響を表しています。この報告ではまず第一に本道について、それがどこを起点としているのか、すなわち初期のシリア語作家たちが過去から継承した、主要な文化的要素について考察してみたいと思います。次いで、シリア語文学の本道を横切っている双方向道路がどういうものであるのかを描いてみたいと思います。このことを最も要領よく理解するには、他の言語からシリア語へ、またシリア語か

ら他の言語への翻訳を見るに如くはありません。もちろん、諸文化の十字路としてのシリア語文学というテーマを考察するには、他にも多くの方法があるでしょう。けれども私が選んだ方法でも、ある視点からそれに光を当てることはできるのではないかと考えています。

## II. シリア語文学の起源

初期のシリア語作家たちが過去から受け継いだ主要な要素を特定する作業は、簡単なものではありません。というのも、ベルシア帝国治下とローマ帝国治下でそれぞれ著作したアフラハト<sup>2)</sup>とエフレム<sup>3)</sup>という、4世紀の偉大な作家以前に関しては、シリア語の文学はほんのわずかしか残されていないからです。それでもこの遺産については、4つの主要な構成要素に分けることができるでしょう。それはすなわち古アラム語、古代メソポタミア、ユダヤ教、そしてギリシア語 [の各文学] です。

アラム語で書かれた文献は、少なくとも紀元前5世紀にまでさかのぼることができます。エジプト南部のエレバンティネ島 [ナイル川上流の中州] から発見された、『賢者アヒカルの言葉』のパピルス断片がこの時代のものであります<sup>4)</sup>。紀元前1千年期の後半のものとしては、アラム語で書かれた3つの文献が残されています。それは、[旧約] 聖書の『エズラ記』と『ダニエル書』のアラム語部分、死海文書のなかから発見されたアラム語文献の諸断片 (最も保存状態のよいものがいわゆる『外典創世記』<sup>5)</sup>で、族長たちの口を通して話が語られます)、そして3つ目は、長いパピルスの巻物にエジプト・デモティック (民衆文字) で書かれたアラム語文学の諸文献です (P. Amherst 63)。この他にもこの時期のものでアラム語の文学が存在していたことはまず間違いありませんが、それらはみな失われてしまいました。わずかに残されている、初期のアラム語文学のなかから、シリア語は『賢者アヒカルの言葉』と [旧約] 聖書のアラム語文書を確実に継承しています。クムランから発見されたアラム語断片のいくつか—たとえば『トビト書』、『エノク書』そして『ヨベル書』—はシリア語でも完全な形で (『トビト書』) あるいは抜粋で (『エノク書』と『ヨベル書』) 知られていましたが、これは、ギリシア語の介在を経たものであって、アラム語から直接のものではありません。

シリア語文学における古代メソポタミアの要素は、その性質がより一般的なもの、つまり文学様式と比喩表現という2つの形態です。前者の典型例は、「優劣論争」の形態で受け継がれます<sup>6)</sup>。これらの「論争」の最初の例は、既にシュメール語文学のなかに確認できますが、アッカド語文学においても常に特徴的で、よく用いられる形態でした。しばらくすると、この形態はシリア語に受け継がれて豊かな展開を見せますが、それにとどまらず、ユダヤ教・アラム語 [文学] や中世ベルシア語 [文学] にも継承され、続いてベルシア語やアラビア語、現代においては現代 [口語] シリア語や現代 [口語] アラビア語方言にさえ継承され続けているのです。

ユダヤ教からの遺産は、3つの要素があります<sup>7)</sup>。最も顕著なのは、旧約聖書のペシッタ

訳〔シリア語訳聖書〕が、(ギリシア語の『七十人訳聖書』からではなく) ヘブライ語から直接翻訳されたことです。次に挙げられるのは、相当な分量をもつユダヤ教文学で、ギリシア語で書かれたものや、ギリシア語に翻訳されて残っていたものがシリア語に翻訳されたものです。このなかには、旧約聖書の第二正典(あるいは外典。唯一『集会の書／ベン・シラの書』だけがヘブライ語から直接翻訳されています)や『バルクの黙示録』のようないくつかの作品が含まれています<sup>8)</sup>。最後に、ユダヤ教からの3つ目の要素として、ユダヤ教・アラム語の伝統から受け継がれてきた独特の言い回しや、初期キリスト教の他のどの伝統にも見られないようなユダヤ教〔独自〕の積義の伝統が挙げられます。

シリア語文学の最も古い時代でも、ギリシア語は既にかれこれ500年ほどの間、中東において際立った存在感を示していました。そのため初期のシリア語テキストにおいてさえその影響がみてとれることは、さして驚くべきことではありません。それはたとえばギリシア語からの借用語(旧約聖書ペシッタ訳に既にその数が多いことが特徴です)という〔単純な〕形をとることもあれば<sup>9)</sup>、バルダイサンと関連する『諸国の慣習の書』の哲学的な対話にみられるように、ギリシア独特の形態が用いられるといった、より深淵な方法の場合もあります<sup>10)</sup>。

初期シリア語文学に受け継がれた、これら4つ別々の要素がどれほど色濃いかは、それぞれの作品や作家によって異なります。同時代のものであっても、その度合いが際立って異なることもあります。それは、ヘレニズムの影響が強い『諸国の慣習の書』を、それとは全く趣を異にする『ソロモンの頌歌』<sup>11)</sup>と比べてみるだけではっきりします。そしてもちろん、何世紀もの間にその度合いも変化します。ギリシアの要素はますます色濃くなり7世紀に最盛期を迎えますが、それはシリア語の親ヘレニズムの頂点を画すものと言えましょう。けれどもそれ以前の時代には、シリア語文学はその独特の、そして多面的な特徴を発展させていました。ですから、7世紀の多くのシリア語作家たちの親ヘレニズムはギリシアの文化価値に魂を売り渡したかのようにとらえるのではなく、価値の高いと認識されたギリシアの伝統の要素と融合して新たなものを創りだしたととらえるべきなのです。このことを理解するには、ギリシア文化への盲愛に対するセウエルス・セボクト<sup>12)</sup>の批判を読んでみるだけで十分です。

### III. シリア語に翻訳された作品

さて、ここまでは私たちの十字路の本道について、このシリア語文学の本道がどこにその主要な起源をもっているのかを概略的に示してきました。そこで次にはこの本道を横切っている、シリア語とその他の諸文化との共時的・同時代的接触ということに話を移したいと思います。前にも述べましたように、私はこの接触をシリア語からの翻訳とシリア語への翻訳を例にとりて示したいと思います。あるいはこう言い換えることができるかもしれません。つまり、ある作品が他の言語に翻訳されていくなかで、一体誰が何を讀んだのかという問題

です。私としてはシリア語から他の言語に翻訳された、いくつかの翻訳のほうに焦点を当てたいので、まずは他の言語からシリア語への翻訳から始めたほうがよいでしょう。

時系列的に、最も早いシリア語への翻訳はヘブライ語からのものでした。それはもちろんヘブライ語で書かれた聖書であり、このかなり浩瀚な文学集成のシリア語訳は〔紀元後〕2世紀の間に、ユダヤ人もしくはユダヤ人キリスト教徒の手によって行われたようです。興味深いのは、このヘブライ語からの翻訳作業には、ヘブライ語〔聖書〕の正典としては扱われなかった作品も含まれていたことです。それは現代になってカイロ・ゲニザ古文書蔵とユダヤ砂漠でその断片が発見されるに及んで初めて、そのヘブライ語起源が明らかになったものです。その作品とはもちろん『ベン・シラの手紙』のことです<sup>13)</sup>。ヘブライ語の知識は、シリア語圏キリスト教のなかでやがて消滅してしまい、7世紀のエデッサのヤコブ<sup>14)</sup>のように、まれにヘブライ語の知識をもつ学者がいても、その知識は包括的というにはほど遠いものでした。また8世紀の終りに、エリコの近郊で〔いわばもうひとつの〕「死海文書」の発見がありました。そこで見つかったダビデの詩編の補遺はキリスト教に改宗したあるユダヤ人によってシリア語への翻訳がなされたものでした<sup>15)</sup>。

ギリシア語からシリア語への翻訳の量は、その他のあらゆる言語から訳されたものの量を、間違いなくはるかに上回るものでした。およそ200年から700年までの500年間に、膨大な数のギリシア語文書がシリア語に翻訳されました。8世紀の終わりから9世紀初頭にかけて、バグダッドにおいてカリフたちの後援によってアッバース朝翻訳運動が盛んになるとアラビア語への翻訳が始まりますが、そこでは数多くの文書が一度シリア語に訳されてからアラビア語に翻訳されました<sup>16)</sup>。

翻訳される文書の性格は、時の移り変わりとともに変化しました。ギリシア語からの最も早い翻訳はもちろん新約聖書であり、おそらく2世紀の終わりのことであつたでしょう。しかしその後度々改訂が施され、とりわけまず400年頃には新訳聖書のベシッタ訳のテキストが今日の形になりました。508年にはマップークのフィロクセノス<sup>17)</sup>が推進した改訂が、そして615年頃にはハルケルのトマス<sup>18)</sup>による全面的な改訂が行われました。フィロクセノスをはじめとして『七十人訳聖書』を高く評価していた人々がいたことを考えると、ハルケルのトマスと同時代に活躍したテッラのパウロ<sup>19)</sup>が行ったものの以外に、旧約聖書のギリシア語訳〔『七十人訳聖書』〕から訳された完全なシリア語訳が存在しないことに、驚かれるかもしれません。もっとも、個々に行われた翻訳もあったことは確かです。おそらくフィロクセノス自身が推進したもの（いわゆるシロ＝ルキアノス訳<sup>20)</sup>）や、もうひとつはエデッサのヤコブが晩年に作った、ベシッタ訳と『七十人訳聖書』の両要素を合わせた形のものがあります。

ギリシア教父文書の最も早い翻訳は、4世紀にまでさかのぼるかもしれません。411年までにはいくつかの長編の文書がシリア語で出回っており、それがこの年の11月にエデッサで転写されたのです<sup>21)</sup>。5世紀から6世紀にかけて、驚くべき数のギリシア教父作品が翻訳

されました。イグナティオス<sup>22)</sup>やアリストイデス<sup>23)</sup>の『弁明』などのいくつかの例外を除いて、翻訳されたギリシア作家のほとんどすべてがニカイア [325 年] 以後の作者たちです。そのなかではアタナシオス、カッパドキア [三] 教父、アレクサンドリアのキュリロスといった 4、5 世紀の偉大な人物たちが、詳しく紹介されています。これらの翻訳のなかには、ギリシア語で失われてしまった作品も含まれているために、初期のギリシア・キリスト教 [文献] の研究にとって非常に重要なものが少なくありません。それはカルケドン派の伝統のなかでは支持を得られなくなったエウァグリオス、モプスエスティアのテオドロス<sup>24)</sup>、そして [アンティオキアの] セウエルスといった人々のギリシア語原著だけでなく、エウセビオスやアレクサンドリアのキュリロスのような、よく知られた作家の作品についてもいえます。6 世紀のシリア正教会のなかでは、セウエルスやテオドシオス<sup>25)</sup>やカッリニコスのペテロ<sup>26)</sup>といった同時代の作家たち [の作品] もまた、すぐに翻訳されました。7 世紀になると、教父文学を新たに翻訳するよりも、以前の翻訳をより綿密に改訂することが問題となりました。ただし例外としてカルケドン派 [=ギリシア正教] のものがあり、そこではシリア語がギリシア語と並んで依然重要な典礼用語でした。このため、エルサレムのソーフロニオス<sup>27)</sup>の『手紙』(この作品はシリア語以外では残っていません) やシナイのヨハネ<sup>28)</sup>の有名な霊的な [事柄についての] 古典『階梯』のシリア語訳が残されているのです。ルーム [ギリシア] 正教<sup>29)</sup>の集団内で、ギリシア語から [シリア語へ] の翻訳の新たな契機となったのは、彼らの古いアンティオキア式の典礼が「コンスタンティノポリス化」された時でした。すなわち彼らは、9 世紀後半から 10 世紀にかけてコンスタンティノポリスのピザンツ式典礼に合わせるようになったのです。これは、ギリシア語の典礼文書だけでなく、クレタ島のアンドレアス<sup>30)</sup>やダマスカスのヨハネ<sup>31)</sup>といった有名な詩人たちの作品が翻訳される、大掛かりな計画であったに違いありません。それらの作品のなかには、やがてシリア正教の典礼の伝統に採用されていくものもありました。このような驚くべきシリア語の翻訳史の側面は、あまり認識されてきませんでしたので、今後は然るべき研究が期待されます。

さて、世俗の分野 [非キリスト教文献] でギリシア語の文書が初めて翻訳されたのは、おそらく 5 世紀のことでしょう。これらは主に道徳的な内容の作品です。プルタルコスの論説『怒らないことについて』<sup>32)</sup>、テミスティオス<sup>33)</sup>の『徳について』(これは偶然ギリシア語で残されていない作品) などがその例です。これらの作品はかなり自由に翻訳され、キリスト教徒の読者の便宜を考慮して容易に翻案されがちでした。これらの作品はとりわけ修道士たちの間で高く評価されていたようですが、その影響力はアリストテレスの初期の [?] 論理学書である『オルガノン』に比べればはるかに小さいと言わざるを得ません<sup>34)</sup>。その [オルガノン、つまり] 「道具」とは、レーシュアイナーのセルギオス<sup>35)</sup>の言葉を借りれば、それなしには医学についての著作の意味がつかめないもの、哲学者たちの考えが理解できないもの、ひいては神聖なる聖書の真の意味が発見できなくなってしまうものなのです。レーシュアイナーのセルギオスは、[しばしば想定されるように] ポルピュリオスの『イサゴゲー』

やアリストテレスの『範疇論』を初めてシリア語に翻訳した人物ではないかもしれません。しかし、アリストテレスの論理学に関する 2 本の『序論』によって、これらの作品をシリア語読者に紹介したのは、間違いなく彼が最初なのです。アリストテレスはその後、シリア語の学問に関する著作に、計り知れない影響を与えることになりました。これらが最初に翻訳されたのはおそらく 6 世紀の初め、つまりセルギオスの生存中のことであつたでしょう（彼が亡くなったのは 536 年です）。セルギオスはこの他に、2 つの重要な翻訳にも関係しています。それは、ディオニュシオス・アレオバギテース<sup>36)</sup>の名で著された書物の翻訳集成であり、またギリシア世界において医学に関する偉大な権威であつたガレノスの浩瀚な著作の翻訳です。ここにおいても、セルギオスは後のシリア語著作家たちに、新たな分野の興味をかき立てることになりました。そして（以下で見ると）数多くの医学に関するシリア語の著作は、後に他の言語に翻訳されることになったのです。

7 世紀には、アリストテレスの『オルガノン』の翻訳（あるいは改訂）や（バラドのアタナシウス<sup>37)</sup>やエデッサのヤコブによる）手引き書の作成が、この〔論理学という〕学問の発展とともに更に行われるようになりました。宇宙論や天文学は既にセルギオスの多くの関心の的のひとつでありましたが、この分野、とりわけ天文学に興味をもつたのは、他でもない 7 世紀半ばのセウェルス・セボクトでした。今日では失われている科学に関する多くのギリシア語作品の翻訳のうちで、7 世紀に行われたものがいくつかあつたはずですが、確かに、こうした翻訳が最も盛んに行われた時期は、8、9 世紀に初期アッバース朝のカリフたちの主導のもとで行われた大翻訳運動であつたことは間違いありません。そこには、ギリシアの哲学と科学とをアラビア語で読めるようにという飽くなく熱望があつたわけですが、この目的のためには、まずシリア語の学者たちの協力が必要でした。というのも、彼らに関心を持っていた著作のいくつかは、既にシリア語になっていたからでした。さらに、未だシリア語版が存在していなかったものについても、やはりシリア語学者たちの助けが必要でした。それは、ギリシア語からアラビア語に直接翻訳するという伝統が未だになつたのに対して、こうした種類の作品をシリア語に翻訳する経験が、既に 200 年近くあつたからです。このような理由により、この時期に行われた初期の翻訳は全て、2 つの段階を経て行われました。つまり、まずはギリシア語からシリア語へ、そしてシリア語からアラビア語へというものでした<sup>38)</sup>。こうした状況は、9 世紀にいたるまで広く行われ続けました。こうした翻訳家たちのなかでも最も有名なフナイン・イブン・イスハーク<sup>39)</sup>は、このような方法でたびたび翻訳を行ったことを、はっきりと伝えているのです。こうしたシリア語の翻訳家たちによる貢献がなければ、翻訳活動は決して進捗しなかつたでしょうし、その後のアラブ哲学の発展も全く違つていたものになっていたことでしょう。そして中世ヨーロッパの伝統もまた然りです。というのも、12 世紀のスペインにおいてアラブの哲学をラテン語に翻訳することによって、スコラ哲学の興隆が生み出されることになり、西洋における最初の大学の発展につながつたのです。こうして考えてみると、シリア語翻訳者が成した貢献は、非常に興味深いもので

す。

シリア語に翻訳されたもうひとつの史料は、中世ペルシア語 [文献] です。これは、[シリア語以外では] ほとんど何も残っていない作品であるために、6 世紀から 7 世紀にかけてなされたこれらのシリア語訳は、一層興味深いものになるわけです。比較文学の観点からこれらの翻訳のなかで最も重要なものは、ペリオデウテース (巡察使) ブードによってなされた、『カリーラとディムナ』として知られる、動物に関するインドの寓話集です<sup>40)</sup>。この 6 世紀の [シリア語] 訳は、この面白い寓話の数々を記した、中東言語では最も早いものです。後に 15、16 世紀になるとアラビア語やペルシア語版を介してヨーロッパに入ることになります。また、アラビア語訳から『カリーラとディムナ』の新しいシリア語訳が 2 つ作られました (以下参照)。

中世ペルシア語からシリア語に翻訳されたと思われるもののなかで、次に有名なのが、[伝カリステネス著] 『アレクサンドロス大王物語』です<sup>41)</sup>。ドイツの偉大なセム語学者テオドル・ネルデケによれば、シリア語版はギリシア語から直接翻訳されたものではなく、中世ペルシア語からであるといえます。けれども、この考えには最近では疑義が呈されており、この問題ははまだ「要検討」(*sub judice*) と考えられるべきでしょう。中世ペルシア語起源がより確かである作品に、多くの素晴らしい聖人伝の類があります。それらの作品は後期ササン朝期における東方教会の殉教者たちを扱っています。もっと驚くべきことに、セウエルス・セボクトがアリストテレスの哲学に関するある著作を、中世ペルシア語からシリア語に翻訳したと言われています。しかしこれは、ペルシア人パウロ<sup>42)</sup> がペルシアの王 (シャー) ホスロー I 世 [位 531-579 年] に宛てて書かれたとされるこのことについて現存している作品とは別のものと考えられています。

シリア語とアラビア語の長い共生期間にもかかわらず、アラビア語からシリア語への翻訳数はごく限られたものです。この理由は明らかで、シリア語に通じていた人のほとんどがアラビア語を解したので、その必要がほとんどなかったからです。とはいえ、いくつか重要な作品も存在します。たとえば、中世ペルシア語から翻訳されたものとは別に『カリーラとディムナ』の翻訳が 2 つ残っています。1 つ目はイブン・アル・ムカッファアがおそらく 10 世紀に行った中世ペルシア語からアラビア語への翻訳です。かれこれ 400 年の間で [『カリーラとディムナ』が] 劇的にその種類を増やしていることは興味深いことです! もう 1 つは、これもアラビア語からのものですが 100 年少々前、つまり 19 世紀に、偉大なカルデア語学者トーマー・アウドーによってなされました。この大衆的な性格を持つ 2 番目の作品は、『シンドバッドと七賢人物語』であり、これもまたアラビア語からシリア語になりました。この場合も、もともと中世ペルシア語のものがアラビア語に翻訳され (どちらも現存していません)、その後シリア語に訳されたもので、作品の伝承史を鑑みるとこの上ない重要性もっています。その他現存する訳はすべてこのアラビア語訳にさかのぼりますが、唯一ギリシア語訳だけは、シリア語訳に由来するものです。



特にキリスト教文書については、かなりの数の翻訳があり、とりわけまだ校訂されていないものも数多くあります。なかでも重要なものは、13世紀の偉大な博識家バル・エブローヨー [バル・ヘブラエウス] が行ったアラビア語作品の翻案です<sup>43)</sup>。彼は他の文化に対して驚くほど開かれていたために、アラビア語作家の作品をかなりの数シリア語に翻案しました。たとえばガザリーの『宗教諸学の甦生』を自分の『エーティコン』に、アブー・サアド・アル・アービーの『散らばった真珠』を、笑い話を集めた『笑いをもたらし心の憂いを取り払う話の書』にといった具合です。

アラビア語からシリア語への翻訳は最近までずっと続けられています。ここでは、フィロクセノス・ユハノン・ドラバーニー (1969年没) が、後年行った数多くの翻訳に言及するだけで十分でしょう。彼の作品には、総主教 [イグナティオス・エフレム I 世] バルソーム [(1887-1957)] の非常に貴重なシリア語文学史である『散らばった宝石』や、パウロス・ベフナムの劇『テオドーラ』、そしてコプトの修道士ミカ・イル・ミナによる神学目録などがあります。

時間と紙幅の関係から、ペルシア語やラテン語といったその他の言語からの翻訳に関しては触れないでおくのが賢明かと思えます。

#### IV. シリア語から翻訳された作品

さて、文明の十字路という私たちの最初のイメージに戻りましょう。ここまで私たちは本道の起点と、左右から本道へと向かってくる交通、つまり他の言語からシリア語への翻訳について見てきました。こんどは、本道から遠ざかっていく交通、すなわちシリア語から他の言語への翻訳に話を移したいと思います。これらについては、これまであまり知られておらず、評価もなされない傾向にありました。しかし、これから見るように、これらの翻訳のなかには極めて影響力のある翻訳があるのです。

シリア語からは驚くほど多くの言語に翻訳がなされています。ギリシア語、アルメニア語、中世・現代ペルシア語、グルジア語、アラビア語、ソグド語などがそれで、ごく最近では、実に様々な現代語にもなっています (たとえば、フィンランド語、ハンガリー語、トルコ語、マラヤーラム語、そして日本語など)。さらに、シリア語からギリシア語に訳されたものの多くは、そこから更にその他の言語、とりわけ [教会] スラブ語やラテン語に翻訳されました。またシリア語からアラビア語に訳されたものは更にエチオピア語に翻訳されたのです。

シリア語からギリシア語やアラビア語への翻訳に関する個別の歴史について見る前に、今述べたばかりの他の言語について少々触れておきましょう。それらのなかでは、アルメニア語が最も重要です。というのも、初期のシリア語文学の多くが、アルメニアのアルファベットが発明された [紀元後 5 世紀] 直後の時期に、そのアルメニア語に翻訳されているからです。ヨーロッパにおいてアフラハトの著作が最初に編纂されたのは、実はアルメニア語版でした (その際彼の『講話』は、ニシビスの主教ヤコブに帰されていました)。大英博物館

がエジプトのデイル・エス・スルヤーニーにあった（当時は）コプト正教となっていた修道院から古代シリア語の写本を大量に購入したことで、初めてシリア語の原版が手に入るようになったのです。エフレムの膨大な著作に関してもまた、早い時期にアルメニア語に翻訳されました。そして、彼の『パウロ書簡註解』のような著作は、現在でもアルメニア語でしか残されていません。ごく最近まで、『ディアテッサローン [調和四福音書] 註解』に関しても同じ状況でした。こちらの件に関しては、シリア語原版の一部が2度それぞれ別の場所で骨董市に出され、運良くダブリンのチェスター・ビーティー図書館が購入しました。この図書館の受託者たちは、この胸躍る重要な発見を公刊するために、アルメニア語訳を再校訂したばかりのルイ・ルロワールを招聘しました。ルロワール師の第2分冊は、彼が亡くなる直前、かれがアルメニア語のテキストを校訂してから半世紀近くも経った、1990年に出版されました<sup>44)</sup>。

その他にもかなりの数のシリア語文書が、早い時期に—おそらく5世紀の前半に—アルメニア語に翻訳されました。これらのなかには、相当な数にのぼる『ペルシアの殉教者伝』のような、もともとシリア語で著されたものばかりでなく、重要なギリシア語著作家たちのものがシリア語に翻訳されたものもあります。ですからたとえば、エウセビオスの『教会史』やバシレイオスの『創造の六日間に関する講話 [ヘクサエメロン]』はともに、一旦シリア語にされた上でアルメニア語になったのです。

シリア正教とアルメニア正教との関係は、常に緊密なものでしたので、シリア語からアルメニア語への翻訳がその後何度も行われたことは驚くに値しません。医学を扱った2人、イーショーホ<sup>45)</sup>とアブー・サイード<sup>46)</sup>の場合、彼らの著作はアルメニア語でのみ現存しています。13世紀に翻訳された著作のなかでも特筆すべきものは、総主教大ミカエル<sup>47)</sup>の『年次記』であり、アルメニア語に翻案されたものが、2つの版で残っています。

さて、数多くのシリア語著作家 [の作品] はグルジア語になりましたが、翻訳は直接シリア語からなされたわけではないようです。というのは彼ら [の作品] はアルメニア語やアラビア語を通してグルジア語になるのが、ほとんどだったからです。実は10世紀の終わりから11世紀の初めにかけて、グルジアとシリアの修道士たちが、パレスティナにあったカルケドン派のマル・サバ修道院やシナイで共に生活していた時期がありました。この時期にギリシア語やアラビア語からグルジア語へ、多くの翻訳がここで行われ、そのなかにはシリア語で書かれた著作も含まれていた可能性は否定できません。

シナイ山の聖カテリーナ修道院において新たに発見されたグルジア語の写本のなかに1枚の羊皮紙があり、その下の部分に書かれていたのは、これ以外では完全に失われてしまった、現存する唯一のコーカサス・アルバニア語の作品でした。現段階ではまだ解読作業が終了していませんが、そのテキストが『パウロ書簡からの日課書』に由来するものであることは既に明らかです。私たちの観点から重要な点は、固有名詞がギリシア語やアルメニア語の形ではなくシリア語の形になっていることです。このことから考えて、翻訳がシリア語から

直接なされた可能性があります。

シリア語のソグド語への翻訳に関して私たちが分かっていることはいずれも、中央アジアのトゥルフアン・オアシスにある東シリア系修道院で発見された 9 世紀から 11 世紀の断片からの情報です。これらの断片は、シリア語—ソグド語 2 カ国語併記の日課書やその他にいくつかの聖書の文書とならんで、驚くほど多くの翻訳を含んでいました。たとえば、エウァグリオス、ニシビスのババイ<sup>48)</sup>、ダディーショー<sup>49)</sup>、そして『エフェソスの眠れる七聖人』や数多くの『聖人伝』や『ペルシアの殉教者伝』などです。

6 世紀期から 7 世紀にかけた一時期、中世ペルシア語で浩瀚なキリスト教文学が存在していたことは明らかです。私たちがこれまで見てきたように、これらのなかにはシリア語に訳されたものもありますが、逆方向で翻訳されたものももちろんあったはずですが。しかしこれらのうち、詩編の断片（これも [新疆ウイグル自治区吐魯番郊外にある] <sup>トゥルフアン</sup> 葡萄溝で発見されました）を除くと、全く何も残されていません。

現代ペルシア語におけるキリスト教文学の歴史は、ほとんどまだ研究されていません。しかし、ロシアの研究者アントン・プリトゥラがこの問題に関する研究書を準備中です。シリア語からの翻訳はもちろん行われ、聖書の翻訳については比較的知られています。そのため、1341 年の福音書の写本があり、それらは『ウォルトンの多国語訳聖書』に使われていました。またペルシア語訳のディアテッサローンは、1574 年にヒスン・ケフ村のシリア正教の司祭によって書写された写本に保存されていました。また最近、ある程度の数のペルシア語訳されたシリア語の著作がテヘランにあるカルデア [教会]・聖ヨハネ・センターによって刊行されました。ただし、これらはフランス語や英語からの重訳です。

中国の敦煌 [莫高窟] から最近発見された文書は、[アッシリア] 東方教会による東アジアへの宣教に、新たな光を投げかけることになります。この文書は、シリア語の行間にトルコ系言語であるウイグル語の翻訳が書かれた、典礼に関する 1 冊の文書です。

シリア語のトルコ語への翻訳は、もうひとつの未知なる分野です。私が見つけた最も早い時期の例は、1604/5 年の年号が記された写本で (Paris Syr. 371)、シリア語、アラビア語、トルコ語の 3 カ国語併記の詩です (『賢者アヒカルの言葉』の初期のトルコ語訳は 1575 年の写本に残っていますが、これはアルメニア語を介した翻訳です)。

さて今後の課題としては、シリア語からマラヤーラム語への翻訳に関する研究があります。これらは、その多くが典礼文書であるようですが、これらの歴史を調べてみることはとても興味深いですし、研究価値のあるものでしょう。

シリア語からギリシア語への翻訳に戻ります。これらの存在はしばしば忘れられたり、見過ごされています。これはおそらく、シリア語からギリシア語への翻訳がその逆の翻訳にくらべてはるかに数が少ないことによるのでしょう。けれども実際には、かなりのシリア語の著作がギリシア語になり、なかには極めて影響力の大きいものもありました。

すでに 4 世紀においてエウゼビオスは、バルダイサンの『運命について』という著作—

実際には『諸国の慣習の書』という題名ですが—のギリシア語訳を引用しています〔『教会史』IV 30〕。また、『教会史』において、彼はエデッサの王アブガルとイエスの書簡を引用しており、彼によればこれはシリア語の文書が翻訳されてエデッサの文書館にあったといえます。こうした有名な偽典文書はすぐに大きな人気を得ることになり、ギリシア語からラテン語に、中世には多くのヨーロッパの言語に翻訳されることになりました。

シリア語の詩、とりわけエフレム〔の作品〕は特に5世紀初めに、シリア語圏外で相当な権威を持っていたことが、いくつもの史料から分かります。これはおそらく、エフレムの作品の多くがギリシア語に翻訳された時期にあたるのでしょう。その際、彼の名声ゆえに多くの作品が彼に帰されることになりましたが、エフレムの作品はおろかシリア語から訳されたものでさえありませんでした。よく知られているように、ギリシア語訳エフレム作品集は膨大な数になりますが、それを選り分ける作業は、現在のところようやくその緒についたばかりです。

やはり5世紀の始めに属する作品に、ギリシア語訳されたいくつかのシリア語の聖人伝があります。いくつかの『ペルシアの殉教者伝』もそのなかに含まれます。これらの作品は、(聖遺物とともに)ササン朝の冬期の都であり〔アッシリア〕東方教会の総主教座であったセレウキア=クテシフォンから410年にマルテュロポリスのマールーター<sup>50)</sup>によってもたらされたものです。けれども、後世への影響力という点でより重要なのは、『神の人』<sup>51)</sup>と『[キドゥーン]のアブラハムとその姪マリア伝』<sup>52)</sup>という2つのとても有名な聖人伝です。前者については、その主人公の名は匿名になっています。しかし、それが一旦ギリシア語にされると、彼にはアレクシスという名が与えられ、この形で今度はラテン語に、そして西欧中世の多くの言語に翻訳されました。こうして、現存する最古の伝説文学作品である『聖アレクシ[ウ]ス伝』が生まれるわけです<sup>53)</sup>。[一方]洗練された語り口の『キドゥーンのアブラハムとその姪マリア伝』はしばしばエフレムに帰されてきましたが、おそらく彼の死後数十年経って書かれた作品でしょう。これもまた、ギリシア語版がラテン語に翻訳されて西欧中世に伝わりました。そして10世紀にはサクソン人の修道女フロストウィーター<sup>54)</sup>によって劇作されました。

聖人伝はギリシア語に翻訳され続けてきた分野です。セルゲのヤコブ<sup>55)</sup>によって書かれた5世紀の『聖ハニーナー伝』(未刊)はギリシア語に翻訳されたようです。というのも、コンスタンティノポリスの〔典礼用聖人伝である〕シュナクサリオンにその縮約版が残っているからです。6世紀にペルシア帝国による迫害で殉教した女性『ゴリンドゥーフ伝』<sup>56)</sup>の場合、ギリシア語の翻訳のみが現存し、シリア語原版は失われています。

7世紀の終わりに書かれた、性格のそれぞれ異なる2つの作品が、ギリシア語版で極めて大きな影響力をもっていたことが分かっています。その2つとは、メトディオスに帰された黙示録<sup>57)</sup>と、シリアのイサク<sup>58)</sup>の霊的講話集です。この偽メトディオスの黙示録は最近研究者の大きな関心を集めており、シリア語、ギリシア語、そしてラテン語の各テキストの素

晴らしい校訂版が出されています。この作品はアブド・アル＝マリク<sup>59)</sup>の宗教政策に対する反発として、およそ 691/2 年頃に作られたものであることが現在明らかになっています。この黙示録がどういった集団によって生み出されたものであるかを、確証をもって言うことはできませんが、とても早い時期にギリシア語に、そしてラテン語に翻訳されたことは間違いなく、ラテン語の最も古い写本は 8 世紀にまでさかのぼります。ギリシア語の翻訳は度々改訂されましたが、ラテン語のほうは、中世において多くの黙示的作品が生まれる基礎になりました。

シリア語ではニネヴェのイサクで知られるシリアのイサクは、実のところバート・カトライエー [カタール] の出身です。ペルシア湾の西側にあたるこの場所は、7 世紀には東方教会の重要な知の拠点であり、多くの著名な作家たちを輩出しました。イサクの講話の写本巻頭部分の数枚がパリに保管されていますが、このシリア語の写本は、エルサレムの南に位置するカルケドン派 [ギリシア正教] のマル・サバ修道院で書かれたと記されています。もちろん確証はできませんが、8 世紀の終わりか 9 世紀の始めに、アブラミオスとパトリキオスという 2 人の修道士によって、この修道院でまさにこの写本から、彼の作品のいくつかがギリシア語に翻訳された可能性があります。これらの講話が一旦ギリシア語になると、とても広く行き渡ったことが、現存する多くの写本（その写本のうちで、最古のものは 9 世紀にまでさかのぼります）や、ライプツィヒで 1770 年に刊行された印刷本が度々重版されたことによって証明されます。ギリシア語版はまた、中世ラテン語版やスラブ語版のものになりましたし、それらからさらにまた翻訳がなされ、(20 世紀初頭には) ロシア語を経て日本語にも伝わっているのです。

イサクはもちろん [アッシリア] 東方教会の修道士であったわけですが、様々な作家たちのなかでも、彼は (カルケドン派) ビザンツ教会からは排斥されたエウァグリオスやモプスエスティアのテオドロスを引用しています。ギリシア語に翻訳されたイサクの一連の著作は、それ以前の段階で明らかにシリア語でカルケドン派の読者のために翻案されていました。これは、好ましからざる名前を、無難な名前—ニルス<sup>60)</sup>やヨハネス・クリュストモスなど—に変えて行われたのです (こうした慣行のおかげで、エウァグリオスの多くの著作がギリシア語原版で残されており、作者本来の名はシリア語やアルメニア語の翻訳で初めて明らかになることがあります)。

このようにして、アブラミオスとパトリキオスがギリシア語に訳したシリア語写本のなかには、実際にはイサクのものではないものも含まれていました。これらが匿名にされていたために、イサクその人に帰されるようになったのです。ところが、実際に誰が書いたのかということになりますと、これが全くの別人物なのです。4 つの講話は、やや後の時代の東シリアの修道士ダルヤーターのヨハネ<sup>61)</sup>の手によるものであることが現在知られていますし、もう 1 つのもの (『手紙』として知られる) については、マップークのフィロクセノスがパトリキオスに書いた『手紙』を縮めたものでした。かくしてイサクの霊的講話のギリシア語版

は、驚くほどエキュメニカルな著作であるわけです。つまり翻訳されてカルケドン派〔ギリシア正教〕にも伝わりましたが、内容は〔先述の〕東方教会の2人の修道士によるものが大半で、講話のいくつかはシリア正教の修道士〔ダルヤーターのヨハネ〕と主教〔マップークのフィロクセノス〕によるものでした。また、現存するシリア語写本は3つの教会コミュニティすべてで残っており、ギリシア語からアラビア語に翻訳されたものが、エチオピア語訳の原史料となったことも付け加えておいてよいかもしれません。これは、学者の好奇心であるにとどまりません。というのも、中東教会会議における今日のとても異常な状況と密接に関わる問題でもあるからです。中世においてアラビア語に翻訳された東シリア語圏の釈義や霊性文学の多くが、コプト正教やエチオピア正教の伝統に取り込まれているという事実にも関わらず、〔アッシリア〕東方教会はその教会会議から排除されているのです。

イサクの一連の霊的講話は、シリア語からアラビア語への最初の翻訳が行われたのとほぼ同じ時期にギリシア語にも翻訳されたはずです。これらの2つは非常に性格の異なったものです。キリスト教徒の作家たちでアラビア語を最初に用いたのは、パレスティナの修道院にいた修道士たちでした。ですから、この時期にこれらの共同体のなかには多言語の集団がいくつかあったのです。ギリシア語、シリア語、そしてアラビア語という3か国語による詩編の断片は、こうした状況下で生まれた素晴らしい産物です。ですから、最も早い時期にアラビア語へ翻訳された聖書や教父の文書のなかで、ギリシア語ではなくシリア語から翻訳されたものがいくつもあることは驚くにあたりません。

こうした翻訳活動がパレスティナの修道院で行われている間に、もうひとつ、より広範で重要な翻訳作業がバグダッドで進められていました。それは、アッバース朝のカリフたちの後援による翻訳運動でした。私たちはすでに、まずギリシア語からシリア語へ、その上でシリア語からアラビア語へという翻訳がいかに頻繁に行われてきたかを見てきました。ですからギリシア語からアラビア語へ直接翻訳を行う技術がまだ発展する以前の、とりわけ翻訳活動の初期段階において、シリア語からアラビア語への翻訳が重要な役割を果たしたきたのです。アラビア語に翻訳されたシリア語文書は大部分失われてしまいました。一度は存在していたことが知られているシリア語訳の一覧を作製する仕事に携わる人がでてくれば、それは意義深く価値ある仕事になることでしょう。この点に関してかなりの量の情報が、とりわけイブン・アル・ナディームのもののようなアラビア語の百科辞典で見ることができます。しかし、後のシリア語作家のなかで引用されているものから、これらの失われた作品を辿ることができるでしょう。

けれども、アラビア語に翻訳されたものは、ギリシア語の著作のシリア語訳ばかりではありません。シリア語で編纂された、医学に関する2つの手引き書は、アラビア語やその後のラテン語の翻訳において、とても大きな影響力を持っていたことが分かっています。1つはフナイン・イブン・イスハークの著作で、シリア語、アラビア語訳、そして（中世ヨーロッパにおいて標準的なテキストとなった）ラテン語訳の3つの言語全てが現存しています。

一方、2つ目のヨハナン・バル・セラピオンによるものは原版が失われてしまっていますが、アラビア語の3つの異なった版が残っており、ラテン語の翻訳も2種類残っています。

シリア語文学が文化の十字路の役割を果たしてきた様子を描くために、シリア語からの翻訳とシリア語への翻訳を例にとりあげてみました。最後に、16世紀に初めてシリア語とその文学をヨーロッパに持ち込んだ3人〔実際には以下の4人〕の人物に賛辞を捧げ、もって結語としたいと思います。まずは、1515年頃ローマでテセオ・デリ・アルボネジにシリア語の基礎を教えたマロン派の副助祭エリ、1555年にヨハン・ウイドマンシュテッターが編纂した、ベシッタ版新約聖書の初版出版に尽力し、アンドレアス・マシウスとも交流のあったシリア正教の司祭マルディンのモーセ、マシウスへのもう1人の情報提供者であり、ローマで7箇月（1552年11月-1553年7月）滞在した初代カルデア教会総主教のスラーカー。そして、シリア正教の総主教であり亡命したイグナティウス・ニーマタラーで、彼の天文学に関する知識によって、グレゴリウス暦を生み出すにあたって委員会のメンバーに選出されるほどでした。こうした人々やもちろん他の人々たちがいなければ、私たちは多くは今日この場に集うことはなかったかもしれません。

## 訳註

- 1) 論文集のうち、本稿でも度々言及するものに以下のものがある。

### Abbreviations

*FER* S. Brock, *From Ephrem to Romanos: Interactions between Syriac and Greek in Late Antiquity*, Variorum Collected Studies Series; CS 664, 1999.

*SPLA* S. Brock, *Syriac Perspectives on Late Antiquity*, Variorum Collected Studies Series; CS 199, 1984.

*SSC* S. Brock, *Studies in Syriac Christianity: History, Literature, and Theology*, Variorum Collected Studies Series; CS357, 1992.

- 2) (c. 270-c. 345)。東シリア最古の教父で、「ペルシアの賢人」として知られる。ササン朝ペルシアに生まれ、ニネヴェ近郊に暮らすキリスト教教団の高位聖職者となる。著作としては23の『講話』が現存している。
- 3) (c. 306-373)。シリア語圏最大の教父。ニシビスで生まれ、そこがペルシアに占領されるとエデッサに移り、後年を過ごした。聖書註解や『カルミナ・ニシベナ』をはじめとする聖歌など、その著作は多数。
- 4) 『筑摩世界文学大系 1：古代オリエント集』（筑摩書房、1978年）、377-386頁に杉勇（敬称略、以下同様）による概説と翻訳がある。パピルス発見の経緯などについては、伊藤義教『古代ペルシア—碑文と文学—』（1974年、岩波書店）、12-14頁を参照。
- 5) 1946年頃クムランの第1洞窟から発見された死海文書の7つの巻物のうちのひとつで、唯一アラム語で記されている。創世記の内容を敷衍し拡大したもの。日本聖書学研究所編『死海文書—テキストの翻訳と解説』（山本書店、1963年）、232-246頁に伴康哉による概説と翻訳がある。
- 6) 「優劣論争」とは、たとえば暦の月どうしのような擬人化されたものや2人の人物などおおい相対する

- 2つの要素が相克する文学形態のことである。なお、メソポタミア起源とするこの形態が、シリア語文学の伝統に継承されていくことに関しては、S. Brock, “The Dispute Poem: From Sumer to Syriac,” *Bayn al-Nahrayn* 7(28) (1979): 417–26; Idem “Syriac Dispute Poems: The Various Types,” in *FER*; Idem “The Dispute between Cherub and the Thief,” *Hugoye: Journal of Syriac Studies* (on-line journal) 5-2 (2002)などを参照。
- 7) シリア語文学におけるユダヤ教の影響については、S. Brock, “Jewish Traditions in Syriac Sources,” in *SSC* 参照。
  - 8) 『ベン・シラの書』は、日本聖書学研究所編『聖書外典偽典 第2巻』に、『ベン・シラの知恵』として、村岡崇光による概説と翻訳がある。また『バルクの黙示録』については同『第5巻』に村岡崇光訳の『シリア語バルク黙示録』が、同『別巻1巻』には土岐健治訳『ギリシア語バルク黙示録』が概説とともにそれぞれ収められている。
  - 9) ギリシア語とシリア語の翻訳全般に関しては、S. Brock, “Greek into Syriac and Syriac into Greek,” in *SPLA* 参照。特に両者間の借用語に関しては、S. Brock, “Some Aspects of Greek Words in Syriac,” in *SPLA*; Idem, “Greek Words in Syriac: Some General Features,” in *SPLA* 参照。
  - 10) バルダイサン (154–222) はシリアの哲学者、詩人、神学者。現存する最古のシリア語史料を残した。シリア語文化の中心地であるエデッサに生まれ (異説あり)、25歳でキリスト教に改宗し、学友であったアブガル王に仕えた。彼の死後、その弟子たちによって編まれた対話編が『諸国の慣習の書』であるが、これはプラトンの対話編をモデルにしていると一般に考えられている。
  - 11) 『ソロモンの頌歌』は、日本聖書学研究所編『聖書外典偽典 別巻2巻』に大貫隆による概説と翻訳がある。
  - 12) (?–666/7)。ユーフラテス河岸の町ケンネシュリン *Qenneshrin* の司教。当地の修道院はこの頃ギリシアの学問研究が盛んで、彼自身も神学、哲学、数学、天文学などの研究を行った。しかしギリシアの学問に盲従することには批判的で、ギリシアの学問に影響を与えたバビロニア人を自分たちの祖先として、シリア人としての矜持を表明した。彼を含む同時代のシリア知識人がギリシアの学問に対してとった態度については、S. Brock, “From Antagonism to Assimilation: Syriac Attitudes to Greek Learning,” in *SPLA* 参照。
  - 13) 断片発見とその後の研究については、訳註8)の『ベン・シラの知恵』の概説を参照。
  - 14) (c. 640–708)。ケンネシュリンの修道院でギリシア思想を学んだ後、総主教アタナシオス II 世によって684年頃エデッサの主教に任じられる。その後ヘブライ語の知識を活かし、テラダの修道院で旧約聖書の校訂に携わる。
  - 15) 7世紀から8世紀にかけてセレウキアの総主教であったネストリオス派のティモテオス I 世 (位779–823) は、セルギオスという人物に宛てた手紙のなかで、エリコの近郊の洞窟で多くの巻物の発見があり、そこには200以上のヘブライ語で書かれたダビデの『詩編』があったと報告している。ベシッタ版聖書には『詩編』151–155があり、その後クムラン第11洞窟から第151、154、155の各節を含む41の詩編が出土した。
  - 16) アッバース朝期の翻訳活動については、ディミトリ・グタス (山本啓二訳) 『ギリシア思想とアラビア文化—初期アッバース朝の翻訳運動』(勁草書房、2002年)を参照。また7世紀のシリア語文化については、S. Brock “Syriac Culture in the Seventh Century,” *Aram* 1 (1989): 268–80 参照。
  - 17) (c. 440–c. 523)。マップーク (ヒエラポリス) の主教。単性論者であり、師エデッサのイバスやネ



- ストリオス主義に反対した。507/8年に、コーレピスコポス（田園主教）ポリュカルポスの協力を得て、ベシッタ訳新約聖書に改訂を施した（「フィロクセノス訳」）。以下訳註 18）及び 19）も参照。
- 18) 生没年不明。ケンネシュリンでギリシアの学問を学び、タルイーン Tar'in 修道院で修道生活を送る。後にマップークの主教になるが、ビザンツ皇帝マウリキオス（位 582-602）治下でその職を追われる。その後 615/6 年アレクサンドリア近郊の修道院で、ベシッタ訳とフィロクセノス訳のシリア語新約聖書に修正を施した（「ハルケル訳」）。ハルケル訳はギリシア語の単語や語順を無理に当てはめた、シリア語としては不自然なものであるが、ために新約聖書のギリシア語校訂には貴重な材料を提供する。なおフィロクセノス訳以来、新約聖書のシリア語改訂については、*Theologische Realenzyklopädie*, 6, 192 ff. 参照。
- 19) 生没年不明。テッラ（マルディン Mardin の近郊）の主教。メソポタミアでの迫害を避けて、アレクサンドリアに移り、616-7 年頃オリゲネスの『ヘクサブラ』を参照して、『七十人訳聖書』のシリア語訳を完成させる。このためこれはシロ＝ヘクサブラ版とよばれる。
- 20) アンティオキア教会の司祭で後の殉教者であるルキアノス（c. 250-312）は、聖書のテキストを編纂した学者としても有名な人物。彼は聖書研究について、アレクサンドリア学派の比喩的解釈に反対して、字義的解釈をとり、『七十人訳聖書』をヘブライ語原典によって改訂したことで知られる。フィロクセノスは、このルキアノス訳に従ってシリア語で書かれたベシッタ訳に改訂を施したと考えられている。
- 21) 現在知られているシリア語の最古の写本は、エデッサで発見された 411 年の日付のあるものである。この写本にはカエサレアのエウセビオス『教会史』のシリア語版や、偽クレメンスの『再認識 *Recognitiones*』、それにボストラの主教ティトスの作品などが含まれている。この『再認識』には、ベシッタ訳聖書と際立って似通った聖書の読みが含まれ、これ以前にベシッタ訳が存在していた傍証となる。
- 22) (c. 35-c. 107)。アンティオキアの主教。トラヤヌス帝治下で死刑を宣告され、ローマに連行される途上で七通の書簡を著した。その後ローマで殉教する。書簡は当時の教会の状況や制度を知るための貴重な手掛かりとなる。八木誠一訳の『手紙』が『使徒教父文書』（講談社、1974 年）に所収されている。
- 23) (?-c. 140)。初期の護教家。アテナイの哲学者で後にキリスト教に改宗した。シナイ山の聖カテリーナ修道院から発見されたシリア語訳『弁明』によれば、この著作はローマ皇帝アントニヌス・ピウス（位 138-161）に宛てたもので、非ギリシア人、ギリシア人、そしてユダヤ人それぞれの信仰を批判し、キリスト教の真理を弁証する内容になっている。
- 24) (c. 350-428)。アンティオキア学派の神学者で、ヨハネス・クリュソストモスとともにディオドロスのもとで聖書を学んだ。392 年キリキアのモプスエスティア主教になる。聖書の歴史的・文学的解釈を主張して聖書全体を註釈した。弟子ネストリオスの異端の元凶として、死後に異端宣告された。
- 25) (?-566)。単性論主義者で、皇后テオドラの後押しでアレクサンドリアの総主教になる（位 535-566）。様々な異端に対する駁論を著し、ビザンツ帝国下の単性論派の領袖的存在であった。
- 26) (c. 540-591?)。単性論者でアンティオキアの総主教（位 581-591）。ユーフラテス河沿いのカッリニウムで生まれ、修道生活を経てアンティオキア総主教に任じられる。三位異体論に反対し、ア

レクサンドリア総主教 (位 557/8-606/7) ダミアノスへの反駁書を残している。

- 27) (c. 560-638)。エルサレムの総主教 (位 634-638)。ダマスカスに生まれ、エジプトで隠修士をしていたが、後にエルサレムのテオドシオス修道院に入る。エルサレムの総主教に選出されると、キリスト教両意説を盛り込んだ教会会議書簡を各総主教区へ送り、両意説の文書を編集した。
- 28) (c. 525-606)。ヨハネス・クリマコスの名でも知られる。シリアに生まれ、16歳の時にシナイ山の修道院に入り、35歳で指導者の勧めによって山のふもとに小屋を建てて独居生活を始め、聖書と教父たちの伝記を勉強しながら40年過ごした。彼の著作『階梯』はイエスの私生活の年数に合わせて30章から成り、天国への霊的梯子を暗示している。大森正樹編『中世思想原典集成 3: 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』(平凡社、1994年)に『楽園の梯子』(手塚奈々子訳)として所収されている。
- 29) カルケドン信条に立脚する派、メルキト派ともいう。
- 30) (c. 660-740)。ダマスコスに生まれ、675年にエルサレムに行き修道生活を営む。685年コンスタンティノポリスに赴き、孤児の養育に献身。8世紀に入って、クレタ島ゴルテュナの首都大主教になる。聖画像破壊政策に対する抗議によって知られる。
- 31) (c. 650-c. 750)。エルサレムに近いマル・サバ修道院に入って修道士になり、後エルサレム総主教の神学顧問となる。哲学、異端の歴史、正統信仰の3部から成る『知識の泉』を著し、後世に大きな影響を与える。第3部「正統信仰」の抄訳が『中世思想原典集成 3: 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』(平凡社、1994年)に収録されている。
- 32) 柳沼重剛訳『似て非なる友について』(岩波文庫、1988年)に所収。またこの他に、シリア語訳がなされたプルタルコスの作品に『いかに敵から利益を得るか』(柳沼訳『饒舌について』[岩波文庫、1985年]に所収)がある(S. Brock “Antagonism.,” 26-27)。
- 33) (c. 317-388)。バブラゴニアに生まれ、コンスタンティノポリスで学び、当地に学校を開く。コンスタンティウス II 世からテオドシウス I 世にいたる歴代皇帝から重用され、後の皇帝アルカディウス(383-408)の教育にあたる。アリストテレスの註釈で有名。『徳について』の他に、シリア語訳がなされたテミスティオスの作品に『友情について』がある(S. Brock “Antagonism.,” 27)。
- 34) 『オルガノン』は『範疇論』、『命題論』、『分析論前書』、『分析論後書』、『トピカ』、『詭弁論駁論』の6巻から成る、アリストテレス論理学の集大成(よって、原文中の「初期の early」という文言は、何かの間違いか)。なおアリストテレスの論理学に関する著作のシリア語訳に関する概観は、S. Brock, “The Syriac Commentary Tradition,” in *FER* 参照。
- 35) (?-536)。アレクサンドリアで学び、その後修道士、司祭になったと思われる。医学、哲学、天文学についての数多くのギリシア語著作をシリア語に訳し、自らもシリア語で著作した。26に及ぶガレノスの著作のシリア語訳をはじめ、ポルピュリオスの『イサゴゲー』、アリストテレスの『範疇論』、偽アリストテレスの『宇宙論 *De mundo*] 等を訳した功績は非常に大きい。
- 36) 6世紀のはじめごろに「アレオパゴスの裁判官ディオニシウス」の名を冠した一群の著作が現れる。この人物は使徒パウロがアテナイで説教した時に回心した、アレオパゴスの裁判官ディオニシウス(『使徒行伝』第17章第34節)によるものと考えられていたが19世紀後半に、これが6世紀に成立した文書であることが明らかになって以来、この著作は偽書として「偽ディオニシウス・アレオパギタ」と呼ばれる。大森正樹編『中世思想原典集成 3: 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』(平凡社、1994年)に『天上位階論』(今義博訳)、『神秘神学』(今義博訳)、『書

- 簡集』(月川和雄訳)が収められており、この他にも邦訳がなされている。
- 37) (?-686)。ケンネシュリンで学び、683/4年にレーシュ・アイナーの教会会議でアンティオキアの総主教に任命される(位683/4-686)。644/5年にはボルピュリオスの『イサゴギー』の翻訳を行っている。
- 38) 伊東俊太郎はギリシアの学問がシリア語訳されてシリア文化のなかに吸収される動きを「シリア・ヘレニズム」、次にシリア語訳された文献がアラビア語訳されることによるギリシア學術の受容とアラビアの學術の振興を「アラビア・ルネサンス」とよび、この問題の重要性を早くから主張していた。伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス—西欧世界へのアラビア文明の影響』(岩波書店、1993年)参照。
- 39) (809-877)。中世アラブ世界最大の翻訳家。ネストリオス派のキリスト教徒で医者、哲学者、文献学者。ビザンティウムでギリシア語文献学を、バスラでアラビア言語学を修めてバグダードに戻り、「知恵の館」でガレノス、ヒポクラテス、プラトン、アリストテレス、プトレマイオス、エウクレイデスなどの重要なギリシア語著作を極めて正確に翻訳した。
- 40) インドに起源を持つ動物に関する寓話集。東洋文庫に『カリーラとディムナ：アラビアの寓話』として、菊池淑子による翻訳と詳しい解説が収められている(平凡社、1987年)。特に同書4-7頁に掲げられた各国語の主要訳書一覧は、この物語がいかに広範に翻訳されたかを如実に語っており、大変参考になる。ちなみにわが国では上田敏が明治43年に「古代志利亜本 Kal[i]lgh wa-Damnagh」としてこの書の西漸について講演を行っている。上田敏全集刊行会責任編集『定本上田敏全集 第9巻』(教育出版センター、1979年)所収の「伊曾保物語考」参照。
- 41) 橋本隆夫訳『アレクサンドロス大王物語』(国文社、2000年)にギリシア語からの翻訳が収められている。
- 42) (?-571)。彼は、アリストテレスの論理学に関する著作に関する論文を著し、ホスロー I 世に献じた人物として知られている。
- 43) バル・エブローヨーとその作品については高橋英海「シリア正教会の歴史から—グレゴリウス・バルヘブラエウス」『エイコーン』24(2002): 37-54 参照。
- 44) D. L. Leloir, *Éphrem: Commentaire de l'Évangile concordant: texte syriaque* (Manuscrit Chester Beatty 709), folios additionnels, 1990.
- 45) 13世紀シリアはキリキアの司祭。後述ミカエルの『年代記』をアルメニア語に翻訳した人物。
- 46) 12世紀に活躍したシリアの医者で自然哲学者。医学に関する彼の著作はアルメニア語で多く残されている。なおイーショーホとアブー・サイドのアルメニア語で残る著作などについては、S. Vardanyan, “Ancient Armenian Translations of the Works of Syrian Physicians,” *Revue des études arméniennes*, n. s. 16 (1982): 213-19 を参照。
- 47) (1126-1199)。シリア正教の総主教(位1166-1199)。世界の創造から自分の時代までの『年代記』を著した。その『年代記』はシリア語圏におけるものとしては最も包括的なものの一つである。
- 48) (c. 551-628)。ニシビスの学校において学び、イズラ Izla 山の「大修道院」に入る。後にその院長となり、厳しい規律を定めたことで知られる。キリスト論、禁欲主義、聖人伝、典礼に関する著作がある。
- 49) 7世紀に活躍。ベート・カトライーユー Beth Qatrāyē 出身で、修道制や靈性に関する著作を行った。

- 50) ヨハネス・クリュストモスの友にしてタグリット Tagrit の主教。4 世紀から 5 世紀にかけて活躍。ペルシアにおける殉教者の聖遺物を集めたことで Martyropolis と呼ばれる。また自らもペルシアの殉教者伝を著した。
- 51) A. Amiaud (éd.), *La légende syriaque: Saint Alexis, l'homme de Dieu*, Paris, 1889 にシリア語原文と仏訳がある。
- 52) S. Brock and S. A. Harvey (eds.), *Holy Women of the Syrian Orient*, Berkeley/Los Angeles/London, 1987, 27-39 に解説と英訳がある。
- 53) この作品は『サント・アレクシヨ・コンヘソルの御作業』として天正 19 (1591) 年に日本に伝えられている。このことに関しては、松原秀一「東方の苦行僧、聖アレクシウスの変貌」、『異教としてのキリスト教』(平凡社ライブラリー、2001 年 [原書は平凡社刊、1990 年]) に詳しい。
- 54) (c. 935-1001)。現ドイツのガンデルスハイム Gandersheim のベネディクト系女子修道院の修道女。音楽、詩、戯曲などを著した。
- 55) (?-521)。5 世紀の中頃生まれ、エデッサで教育を受ける。セルグのコーレピスコポス (田園主教) になり、その後 Batnan da-Srugh の主教に任命される。数多くの講話 (memrē) の他に、同時代の聖人伝である『聖ハニーナー伝』や『ガラシュの聖ダニエル伝』などの著作もある。
- 56) (?-591)。もとゾロアスター教徒であり、後にキリスト教に改宗する。ホスロー I 世、ホルミズド IV 世 (位 579-90) の迫害にあつて殉教する。P. Peeters, "Sainte Golinduch, martyre perse (m. 13.7.591)," *Analecta Bollandiana* 62 (1944): 74-125 参照。
- 57) 北メソポタミアで 691 年ごろ著された黙示録で、後にギリシア語、ラテン語へと翻訳され、他の黙示文学に大きな影響を与えた。
- 58) 7 世紀に活躍。バート・カトライーユ Beth Qatrayē 出身で、修道生活を経てニネヴェの主教に任じられる。しかしすぐに職を辞して孤住生活に戻った。彼の著作は『第 1 部』、『第 2 部』と呼ばれる講話から成るが、『第 1 部』がギリシア語に翻訳されたことで、修道文学に関してシリア語圏で最も影響力のある作家とみなされた。
- 59) ウマイヤ朝第 5 代カリフ (位 685-705)。アラビア語の公用語化や政治・社会面でのアラブ化を進展させた。
- 60) (?-c. 430)。ヨハネス・クリュストモスの弟子にして熱烈な擁護者。もともとコンスタンティノポリスの宮廷に仕える役人であったが、後にクリュストモスの弟子となる。4 世紀の終りから 5 世紀の始め頃、シナイ山へ向かい、その地で修道生活を始める。
- 61) 8 世紀半ばに活躍。カルドゥー Qardu 山で修道生活を行い、著作として『手紙』や『講話』が残されている。彼の著作はニネヴェのイサクの著作とともにギリシア語に翻訳されたため、ギリシア世界ではイサクの名で紹介されることが多かった。
- 62) 本文は one discourse となっているが、直前の内容から変更を施した。